学びの広場

2020
12月号

問 教育課 学校教育係 ☎(83)7023
生涯学習係 ☎(83)7021

第72回人権週間　12月4日(金)～10日(木)
みんなで築こう 人権の世紀

～考えよう 相手の気持ち 未来へつなげよう 違いを認め合う心～
（法務省 令和2年度啓発活動重点目標）

幸せに生きるために

「人権」とは、「生きていたい」、「自由でいたい」、「幸福でいたい」という、すべての人に共通する三つの願いを支えるもので、「人々が生存と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」のことです。

今年度の人権教育研修会では、「幸せ」に焦点を当て、「自分らしく生きるとは」、「自分の幸せとは何か」をあらためて人権の視点から考えます。

次の作文は、平成30年度全国中学生人権作文コンテストで入賞した熊谷さんの作品です。この作文では、「幸せ」について「一つは愛されること、二つ目はほめられること、三つ目は人の役に立つこと、四つ目は人に必要とされることの四つです。」と述べています。ぜひ、ご一読ください。

人権教育研修会（兼）第5回町民大学

日時：12月５日（土）
午前10時～11時30分
場所：町民文化センター
展示ホール
内容：**幸せに生きるために**
～Well-Being（幸せ・健康）のサイエンスから人権を考える～
講師：前野（まえの）マドカさん
（慶應義塾大学大学院SDM研究所）
申込：**12月２日（水）までに**教育課生涯学習係へお電話でお申し込みください。
定員を50人とします。

境界線のない社会へ

大分県 大分市立原川中学校２年　熊谷（くまがえ）　一輝（かずき）

小学校からの僕の友達に、たっくん、りょうが、みっくんがいます。たっくんは、体が大きくて、力がとても強いです。時々不機嫌になるけれど、根は真面目です。りょうがはとても素直で、裏表がありません。そして、みっくんは人とコミュニケーションをとるのが苦手だけど、生物の知識はとても豊かで、東京大学の先生が主宰する異才発掘プロジェクトのメンバーに選ばれるほどです。ぼくのこの三人の友達は、ひまわり学級にいました。

三人の中でも、みっくんとは一番よく話をしました。僕も、みっくんも、海の生物が大好きで、生物に詳しいみっくんとは、とても話が合いました。先生のすすめで、みっくんは僕と同じ委員会や係活動をすることが多かったです。

僕にとって、三人はとても大切な友達です。今、三人は違う中学校に通っているので、なかなか会うことが出来ません。僕は時々、「三人はどうしているのかな」「みっくんと、生物の話を沢山したいな」と、思います。

そんな時、テレビで日本理化学工業という会社の事を知りました。この会社では、チョークを生産していて、国内の三割の生産率という立派な業績があります。僕が驚いたのは、それだけではありません。全従業員の七割が知的障がい者で、そのうちの約半数が重度の障がい者という事です。しかも、五十八年前から知的障がい者を雇用しているのだそうです。僕は、とてもすごい会社だなと思いました。

健常者にとっては簡単で、当たり前のことでも、知的障がい者にとっては、理解したり、行ったりするのが難しい時がよくあるのだと思います。でも、この会社では、知的障がい者にも理解しやすいように、そして、作業しやすいように、一人一人に合わせて、社長さんたちが工夫していたのです。僕は、会社や工場では、決まったやり方で仕事をしなければいけないのだと思っていました。でも、そうではなく、障がい者の目線に合わせて変えることが出来たら、障がい者に出来ることが増えるんだということに気付きました。

日本理化学工業の社長さんは、どうして障がい者を雇用するようになったかというと、禅寺のお坊さんの教えがきっかけでした。「人間の究極の幸せは、一つは愛されること、二つ目はほめられること、三つ目は人の役に立つこと、四つ目は人に必要とされることの四つです。福祉施設で大事に面倒を見てもらうことが幸せではなく、働いて役に立つ会社こそが、人間を幸せにするのです。」

僕は、すごく素晴らしい教えだなと思いました。そして、その通りだなと、とても納得しました。

社長さんが、仕事が終わると毎日、「今日もよくがんばったね、ありがとう」と、声をかけると、知的障がい者の人たちは、心から嬉しそうな顔をするのだそうです。それで僕も、ふと思い出したことがあります。僕がひまわり学級に行った時の三人の顔です。

学年活動の時間の前、僕はよく三人をひまわり学級に誘いに行きました。すると三人は、とても嬉しそうで、やる気に満ちて生き生きとした顔になりました。ひまわり学級の先生から、母は、「いつも一輝さんが三人を誘いに来てくれるから、とても助かっています。」と、言われたそうです。僕は、みんなで一緒に活動できたらいいなと思って誘いに行っていました。特に決めていたことではなく、いつも何気なく誘いに行っていたけれど、三人は、「必要とされている」と、感じてくれていたのかもしれません。そう思うと、僕は、三人を誘いに行ってよかったと感じています。

障がいがある友達と、ない友達の、違いは何だろう。僕は考えてみたけれど、何の違いも思い当たりません。障がいがあっても、無くても、僕にとってはみんな大切な友達です。何も差はありません。

この世がもしも、健常者だけで成り立っている世界だと想像したら、何の具も無いタコ焼きみたいなものです。タコ焼きには、タコも入っていれば、キャベツやネギも入っている。ソースやマヨネーズもかかっているし、青のりやかつおぶしだってかかっている。僕は、社会も同じだと思います。健常者だけでなく、障がいや病気をかかえる人たち、小さな子どもやお年寄り、日本人や海外の人たち、男の人や女の人、いろんな人がいるのが社会です。健常者が偉いわけでも、一番なわけでもありません。大切なのは、理解すること、協力することだと思います。そして、みんなが平等であれたら良いなと思います。決して簡単ではないと思うけれど、それでも僕は、境界線のない社会になっていくことを目指して、僕に出来ることを考えながら、これからも行動していきたいです。

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催
第38回全国中学生人権作文コンテスト法務事務次官賞